
パクリ 2

UMA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パクリ2

【NZコード】

N34550

【作者名】

UMA

【あらすじ】 パクリってたのしい

「うー……やべえ、アクセル達の試合に間に合ひつか、これ」
そう言いながらバトル会場に向かっているのは、うしだ率いるチームグラン。どうやらチームホープスの試合を観戦するつもりらしいが、随分と慌てている。

「ぐぬぬ……おい貴様！せつかく今大会トップクラスのチームとの試合を見られるチャンスだというのに、遅刻とはどうしたことだ！」

「つむせえ、電気ウナギー黙つてろー。」

うしだが「電気ウナギ」呼ばわりしているのは、シビルダンというポケモン。見た目がウナギに似ている、といえば似ていなくもないが、本当にウナギなのかは定かではない。彼の強力な電撃は相手にとって脅威となるものらしい。

「バカ、これもまた兄貴の作戦なんだよー。」

と言ったのは、頭のアフロがトレードマークであるバッファローのポケモン、バッフロン。うしだのことを「兄貴」と呼び慕っているのは、似た者同士だからなのだろうか。見た目のインパクトでは間違いないバッフロンが上なのだが。

「…………こじから会場までの移動時間は約10分。間に合わない」とはない

冷静に分析しているのは、チームグランの司令塔とも言える存在

であり、地味ながらも影でチームを支える存在でもあるポケモン、ウルガモス。炎タイプと虫タイプという珍しいタイプを持ち合わせており、大きな羽根から繰り出す技の威力は凄まじい。持ち前の知識も合わさり、その実力はリーダーであるうしだすら驚愕するレベルだ。

「んあー……そんならだいじょぶだねー」

先程のウルガモスの言葉を本気に理解しているのかいないのかはよくわからないが、そう言ったのはエルフーンという草タイプのポケモン。言動は軽い感じだが、防御力はかなり高い。得意技である「コットンガード」は、その防御力をさらに強くしてしまったため、突破するのは困難だ。ちなみにチーム唯一のメスであり、まさに紅一点なのだ。

そんなうしだの仲間達だが、彼らはうしだが必死になつて協力を呼び掛けて集められたのだ。うしだがブラキオ達と合流せず、ハツサムやヨノワールと戦わなかつたのは、彼らを集めるためだったのだ。

「しかしあよくここまで個性的なのが集まつたよな」

「無駄口を叩いてる暇があれば走れ、この非常食!」

……ちなみにジビルトンはうしだを「非常食」呼ばわりするポケモン第2号である。

その頃チームホープスは試合会場のベンチで、チームグラビットとの試合開始を待っていた。

ホープス側の一番手はミレーヌ。素早い動きで翻弄するタイプであるミレーヌなら、ある程度相手の戦術を見る事もできるだろといつこもあるのだが、ミレーヌ本人の強い希望があつたからである。

(師匠やノエルさんはうちのチームの軸だし、クラウさん達は今回のバトルで重要なポジションなんだから……しつかりやらなきゃ)

グラビット側を見てみると、既にラムパルドが気合を入れ、試合開始を待っている。あの攻撃力を前にすれば、ミレーヌの防御力は意味を成さないだろう。彼の攻撃を避けつつ、確実に攻めることができ序盤をリードするためのポイントになりそうだ、とミレーヌが考えていた時に、試合開始の時間がやつてきた。

「某の相手はテメェか？随分とチビだな」

「チビチビってナメてると怪我するかもよ、おじさん」

「それでは、試合開始！」

緊迫した空氣の中、試合開始の合図が送られる。それと同時に、両者がぶつかり合うかのように思われた。……だがそうではなかつた。互いに相手の様子を伺い、動き出さなかつたのだ。

(下手に動いて隙を見せれば、相手に先手を打たれるかも。そうな

つたらまずいからね……」レは慎重にいりつ

ミーレースが一番恐れているのは、ラムパルドの攻撃をまともに受け
ること。むやみに飛び掛ることは命取りとなるかもしれない。慎
重な行動を心掛けることは今できる最善の手だわ。

(確かに見かけはチビだが、実力は恐らくかなりのもの……何せ、
あのガブリアス…たしかアクセルだつたか。奴のチームにいるくら
いなんだ。相当の実力に違いねえ。だとしたら油断しないほうがい
い)

ホームス側のベンチで試合を見守っているアクセルの姿を見ながら、
ラムパルドは考えていた。

「おじさん、悩んでるね」

「あ、ん?」

荒い口調のラムパルドに対しても、澄ました顔で話しかけるミーレ
ス。どんな相手にも決して退かない彼女の姿は、彼女自身の強さを
表しているようにも見える。

「今攻めれば罷に掛かるかもしれない……そんな恐れがあるんでし
ょ?」

「……それは挑発か、それとも拙者に対する哀れみか…返答次第じ
やあ考え直さねえとな。だがあえてその質問に答えるとすれば……」

ラムパルドは構える。

「拙者は罠なんぞ恐れねえ」

あるかも分からぬ罠になど恐れる」とは、彼の本能が許さない。罠だらうが攻撃だらうが、相手の思考を越えた手段で捩伏せる。それが彼の持つ特性「型破り」の意味である以上、罠ごときで恐れてはいけない。どうせ当たらなくても碎けるかもしれないのなら当たつて砕けてしまえ、そういうものなのだ。

ラムパルドの返事を聞いたミレーヌはにつこりと笑う。「罠など恐れない」という言葉は、彼女が最も求めていた言葉だつた。たしかにあのまま攻撃のチャンスを伺っているのも良いかもしれない。だが相手と力のぶつけ合い、相手を越えることこそが「勝利」だとミレーヌは考えた。もしラムパルドが罠に怯えるようなポケモンだったら、ミレーヌは納得しなかつただろう。ラムパルドを本気を越え、本当の意味での勝利を手にしたいのだろうか。

「まずはもう刃の頭突きだ！」

ラムパルドの十八番とも言える、強力な頭突き攻撃。まともに受けねばまず耐えられないであらう。

「影分身！」

もう刃の頭突きが命中する直前にミレーヌが分身したことで、もう刃の頭突きは本物とすり替わった分身に命中する。当然ミレーヌ自身へのダメージはなく、攻撃は失敗に終わる。

「今度はこっちからだよ、気合いパンチ！」

ラムパルドの背後を捉えたミレーヌの渾身の一撃が、彼の背中に命中する。しかしダメージは意外と少なく、ラムパルドは平然として

いる。

「効かねえな」

「だったら、ればどうかな?」

ミレーヌは頭部の口を開くと、そのままラムパルドのほうに向ける。

「火炎放射!」

口から高温の炎が吐かれ、ラムパルドに浴びせ掛けようとする。物理的なダメージに期待できないなら、特殊攻撃で攻めるのはどうだ、と考えての行動だ。

「甘い! その程度の攻撃が某に通用すると思ったか!」

「げつ!」

ところがラムパルドの行動はミレーヌの予想を大きく上回っていた。彼はもう刃の頭突きで炎を打ち破り、突進してきていたのだ。

「おひおひおひおひおひ! あ...」

「へつ! ...」

どれだけ炎を浴びせてもラムパルドの勢いは衰えず、ミレーヌはやむを得ず火炎放射を中断し、体制を立て直すことにした。

「ヤバだ! 吹雪を喰らえ!」

しかしラムパルドはそれとも許さない。猛烈な吹雪がミレーヌに襲い掛かる。

「これじゃあ前が見えない……」

吹雪の中では視界が悪く、相手の出方が伺えない。十分に警戒しておかないと、思いがけない方向から攻撃されるかもしねり。

（でも凄い……ここまでレベルの高いバトルができるなんて）

本格的なバトルが始まつてからここまで、僅かなぶつかり合いだつたはずだがかなり疲労している。ラムパルドという強力なポケモンを相手にしていて、普段以上に神経質になつてゐるせいだろう。こちらの攻撃にはびくともせず、強力な技で反撃をしてくる彼を「強敵」と呼ばずに何と呼ぶか。しかしミレーヌも負けてはいられない。あの強靭な肉体を少しでも疲労させておきたい。そうしなければ、彼の猛攻は終わらないのだから。

「火炎放射」

炎が吹雪を溶かし、消し去る。吹雪によつて遮られていた視界は元通りになり、こちらに向かつてくるラムパルドの姿も確認できた。

「気合いパンチ！」

ラムパルドの拳がミレーヌに向かつてくるが、彼女はそれをギリギリで避け、ラムパルドの下に潜り込む。

「こっちも気合いパンチ！」

隙だらけとなつたラムパルドの下顎に、気合いパンチを叩き込む。

「んがあつ……ちつ、やるじやねえか」

気合いパンチで吹っ飛ばされたラムパルドだが、それでもすぐ立ち上がる。一見するとダメージがなかつたように思えるが、ミーネスはそれなりの手応えを感じていた。ダメージを『えられたのは確かだつた』。

「だつたらこれはどうだあ…」

やつぱりとラムパルドは地面を力いつぱい踏み鳴らし、搖らし始める。地面タイプの技でもトップクラスの性能を誇る強力な技、地震である。

「おつととこれは…」

地震の衝撃を防ぎつつ、バランスを崩さないようこてんに耐える。

「まだだーもろ刃の頭突きー…」

それとは対照的に、ラムパルドは揺れる地面をものともせずに攻撃を仕掛けてくる。

「ぐうつ……もつダメー…」

ミーネスが諦めた様子で声を上げた。

「…………なんぢやつて」

「なつー!?

もう刃の頭突きが命中しようとした瞬間、ミーネスの右手が光る。そして頭突きが命中したその時、それは力を発揮する。

「……まさかー。」

「そのままさか。いくよ…カウンターー!」

もう刃の頭突きの威力を受け止め、右手にその力を込めて殴り付ける。

「うがあああああつー。」

カウンターによって倍返しにされたもう刃の頭突きの威力、そしてもう刃の頭突きを命中させたことによる反動に耐え切れず、ラムパルドはその場に崩れ落ちる。

「ふつ……なんとか耐え切れたから助かった…」

ため息をつき、ミーネスはその場に座り込む。どうやら彼女の体力もかなり消費しているようだ。

「ぐつ……あんまとやられちまつた……」

まだ痛む身体を起し、ゆっくりと立ち上がるラムパルド。

「なかなかやるな。まさかあそいでカウンターされるとは思わなかつたぜ」

「へへっ……まあね」

「だが……一つ聞きてえ」とがある。試合が始まつた後、テメエが聞いてきたあの問い……」「

「問い合わせ……ああ、あれ? うーん、なんだろ。おじさんとは、本気のバトルがしたかつたから……かな。もし存在もしない隕に怯えるほどの相手なら、がつかりするだけだから」

「…………あのカウンターは隕じゃねえのな」

初めは納得できない様子だったラムパルドだが、ミレーヌが楽しそうに話し掛けてくる姿を見ているうちに、笑みを浮かべはじめる。彼は言動が荒く、怖いイメージを持たれる場合もあるのだが、本当は優しいポケモンなのだ。この笑みも、彼の優しさから生まれたものだらうか。

「…………おもしれえ奴だ」

そう呟いてフィールドを離れていったラムパルドだが、途中でミレーヌのほうに振り返り、一言こいつついた。

「言ひ忘れてたがよ……おじさんは勘弁してくれ」

それを聞いたか聞いていないかは知らないが、ミレーヌもフィールドを離れ、ホープス側のベンチへと向かつ。

「んじゃ次はワタシが行こうかしぃ」

「…………ああ、頼む」

グラビトウン側からガブリアスが出てきたのを見たのを見たのを見た。どう考へても狙っていたとしか思えないのだが、反論する理由もないためアクセルは彼女のバトルを許可した。

(つづむ……大丈夫だとは思つが……同族として無事を祈る)

何故無事を祈らなくてはならないのか……やはり深く考えるのは止めたほうがいいのだろうか。

「スッゲエ！スッゲエよな兄貴！あのラムパルドをあんな小さな子が倒しちまつたよ！」

観客席で興奮状態になっているのは、チームグランジのバッフルン。

「ああ……正直オレも、マーレースがあそこまで強いとは思わなかつたぜ」

と、うしだ自身も驚いていたようだった。

「こんなバトル見せられちゃあ、オレ達も頑張りなきやな

「ふん、当然だ！」

うしだの視線は、ベンチで仲間の様子を見ているアクセルのほうに向けられていた。

（アクセル……そしてブラキオ。お前らを越えたいという想いが、オレをここに連れて来させた。その想いは今も変わらない。バトル、楽しみにしてるぜ）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3455o/>

パクリ2

2010年10月21日10時26分発行